

面の組み立ての工程を、日本剣道具製作所の興柁輝喜さんが実演しながら説明してくれた。興柁さんは宮崎県伝統工芸士に認定されている。

まず「面巻き」と呼ばれる、面金にわらを巻いていく作業。面金は金属加工の設備が必要のため、日本剣道具製作所で行っているわけではなく、国内に3社ほどあるメーカーのものを使う。連載の中でその現場も訪ねる予定だ。

最初に面金の天の部分にゴムをはめこむ。ちよつとしたことだが他では見られない工夫である。

「このゴムを入れることによって面を叩かれたときの痛みが軽減されます。私どもは（他社製のものも含め）あらゆる防具を修理しますが、このゴムが入っているものは他に見たことがないですね」（興柁さん）

# 日本でつくる 剣道具

—— 剣道具の製造工程、すべて見せます

## 第5回 防具は昔よりも進化している

「たとえばそういう点でも、防具は進化しているんです」と川辺さんが補足する。

「昔の材料はいい、と世間一般的にはいろいろと言われているようですが、昔よりいい材料もできていますし、長年経験するなかで技術の進歩や工夫があります。だから昔の防具よりは今の方が明らかにいい、と私は考えています」

その後も説明を聞いていくうちにさまざま

まな進歩に気づかされることになるが、もちろんベースには伝統的なつくり方があり、そこに現在の技術を取り入れている。面金に巻くのは昔ながらのわらだった。興柁さんが藍染めの生地を切つてひも状にし、わらの上からきつく巻いていく。

「海外ではわらではなくてフェルトなどを入れることが多いです。ほかではばらばらの状態のわらを入れることが多いのですが、うちではロープになっているわらを使います。こっちの方が強いし吸収力が大きい。それに針を刺しやすいんです」（川辺さん）

### 革を取り付ける作業は 湿らせながら一気に行なう

次に顎（一般には突き垂と呼ばれる）を取り付ける。顎についても、国内でつくっているところは他にほとんどないという。日本剣道具製作所では多くの小売店からの注文に応じて防具をつくっているため、顎の型も各小売店用には多くの種類が揃っていた。顎は芯材を入れてまわりを縫っていく。

細かい手作業で簡単ではなさそうだが、女性の職人が慣れた手つきで作業を進めていた。顎の飾り部分は通常途中まで機械で、仕



案内人  
川辺尚彦

(株)全日本武道具、  
(株)日本剣道具製作所代表取締役

撮影＝窪田正仁



顎は飾りの入った表側と裏側の間に芯材を入れて貼り合わせ、周囲をまつり縫いしていく。このあとへりを付けるのも手作業である

上げの段階は手作業で行なう。顎や胴胸の飾りを入れる機械も、日本ではおそらくここにしかないものだという。高級なものは最初からすべて手作業である。

顎を面金につける革と、その後で面金の周囲につける革（縁革）は生革と呼ばれる牛革を用いる。生革を水に浸けて柔らかくし、合間合間で湿らせながら革が乾いて固まる前に縫い付ける作業を終える。時間帯によってする作業が決まっており、撮影日はすでにその工程が終わってしまっていた。

37年間、防具づくりに従事しているという興柁さんは、「自分で『これだ』と納得がいく防具はまだつくれていない」と普段から周囲に言っているそう。つねに向上心を持ち続けていることが防具の進化をもたたしているのだろう。



頭を面金に取り付けるには、生革を使い、縫い付けて固定する。  
生革は水に4~5時間浸けて柔らかくなったところで作業をする



面の縁革にはあらかじめ穴を開け、やはり糸で縫い付けて固定する。  
縫い付ける作業はかなりの力を要する



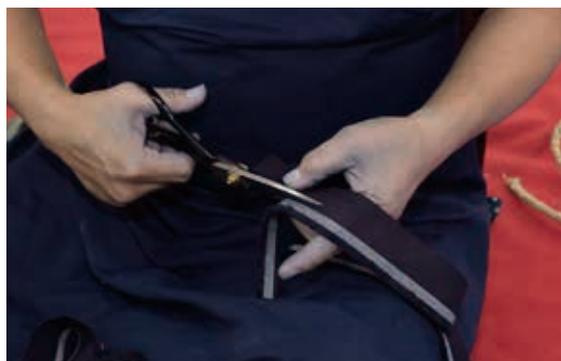
面金に縁革を取り付けた状態。面の完成までにはさらに多くの工程がある (以下次号)



興柁輝喜さん「力を充分入れて、ひと針ひと針しっかりと縫い付けをしなければなりません。それができていないと、丈夫で長持ちするものはできませんね」



面金の天の部分にゴムを付ける。  
長年つくり続けてきた中で生まれた工夫だという



藍染の生地を紐状に切断する



わら縄を面金の周りに沿って、切断した生地を巻きつけて固定していく



天の部分からきつく巻いていく



ひと回り「面巻き」が終了